

[資料紹介] スチュアート研究に関する2つの文献 (1)

| | |
|----------|---|
| 著者 | 戒田 郁夫 |
| 雑誌名 | 関西大学経済論集 |
| 巻 | 12 |
| 号 | 3 |
| ページ | 303-311 |
| 発行年 | 1962-09-20 |
| その他のタイトル | [Material] Two Literatures for Study on Sir James Steuart (1) |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/15475 |

ステュアート研究に関する二つの文献 (一)

戒田郁夫

はしがき

かつて『国富論』のある著名な訳者が、「やがては死ぬべき定めではあろうが、なかなか死なぬのが彼スミスである⁽¹⁾」という言葉でもって、アダム・スミスの学史および思想史の分野におけるフェニックスのごとき存在を簡潔に表現されたが、スミス研究は、とりわけわが国において、いまもなお精力的に行なわれ幾多の成果を収めつつあることは周知の事柄である。そのようにこの分野で華やかな地位を占めているスミスに較べ、彼とは同時代に生き、経済の理論と政策の面で一際すぐれた貢献を行なったにもかかわらず、当時の時代精神から逸脱したために、多年の間スミスの陰に全くかくれ学史の芥溜に捨て去られてきた十八世紀の偉大なスコットランドの経済学者、サー・ジ

ームズ・ステュアートは、まことにその生涯にも似て悲劇の人であった。

しかしながら、近時内外の研究者の手で彼は蘇生せしめられ、永遠の生命を賦与されようとしている。戦後における本格的なステュアート研究の口火を切ったセンの *Steuers* は、『原理』の外側に接吻する人でしかなかった従来のステュアート研究者の誤ったステュアート観を是正して、ステュアートをいわゆる統制経済学の始祖として位置づけると共に、彼の思想体系こそ重商主義から社会主義へ通じる道を敷くものであると主張した⁽²⁾。センの所説は、所詮ケインズとステュアートとの系譜性を求め、後者をマルサス復興の論理的到着点として捉えようとするものであり、そのような目的論的アプローチに對しては、ミック R. L. Meek による鋭い批判があるけれども、然し

ながらステュアート研究の深化を通じて学史の書き替えを行なうという点においては、内外の研究者の等しく志向するところである。

ところで、学史の書き替えという大いなるアンビションを成功裡に達成するには、先ず何よりも『原理』そのものの理論構造を明らかにする必要があることは云うまでもないが、しかしそれだけでは充分でない。小林昇教授の指摘される如く、⁽⁴⁾学史の分析のための準備的な作業であるところの理論的類型確定のそれと、社会経済政治および思想を含むところの時代的背景を明らかにする研究の進捗とが相俟い初めて学説の全貌が浮彫りされて来るのである。

国外におけるステュアート研究に関する限り、これ迄ほとんど未開拓の分野に属していたこの謂わば周辺の研究に最近手がつけられ始めている。それがここで紹介するイーグレイ R.V. Eagly とスキナー A.S. Skinner の論文⁽⁵⁾である。前者は、センがステュアートを経済成長理論のパイオニヤと正しく規定し⁽⁶⁾たにもかかわらず、その論証過程において充分に認識されておらないところの、成長分析に欠くことのできないアスピレーション効果の問題を取りあげ、その学史的系譜性と現代的意義

について論及している。後者も又、センの誤って認識した問題⁽⁷⁾、すなわちステュアートと十八世紀の後半に活躍した所謂スコットランド歴史学派のメンパーとの思想的類似性を取り扱っている。⁽⁸⁾かくて、これら二論文はセンのステュアート研究を補正し、かれの体系の核心により深く迫る踏石であると同時に、最近の国外におけるステュアート研究の水準と動向を探窺する上での好き資料でもある。

註(1) 大内兵衛訳『国富論』(岩波文庫)昭和三十年所取の訳者「解題」一四六ページ。

(2) Sen, Samar Ranjan, *The Economics of Sir James Stewart*. London, 1957.

(3) ミークは云う、過去の思想体系を再評価する場合、われわれはつねにパスベクテイヴの意識をもってそれを考察すべく心掛けなければならない。「もしも我々がステュアートのような或る経済学者の諸見解をそれが提出された経済のおよび知的ミリュウの全体から抽出し、そこから当該諸見解を今日流布せる諸見解の内⁽⁹⁾に存するものと比較するならば、われわれは確かに多くの興味深い形式的な類似点を見出すであろう。しかし仮りに我々が、これら類似点を基礎として経済思想史を徹底的に解釈しなおそうとするならば、その結果

- は恐らく余り有益ではないであらう。……類似性と連続性が検出され得るのは、一部分、経済学者達の分析して来たものが、実際は全く同一の制度(異った発展の諸段階における)であるからであり、また一部分、特定の発展段階において特定の理由で表現された特定の態度が、時々非常に異った発展段階において著しく異った理由で再び表現されるからである。……経済思想史のいわゆる解釈は、その名に値する限り、市場交換制度の経過して来たところの異った発展段階で提唱された主要な諸理論を説くことからは始めなければならぬ。われわれは、ただ単にステュアートの労作と「統制経済学」との間に存する一定の形式的な類似性を基礎として、重商主義から社会主義へ通じる「小径」の存在を主張することはできない。もしもそのように主張するならば、我々は確かに相対論と云う暗礁から逃れるであろうが、しかしそうすれば最後には、目的論と云う渦巻のなかにひきずり込まれるであらう。」Meek, Ronald L., *The Economics of Control Prefigured by Sir James Steuart.* (*Science and Society*, Vol. XXII, No. 4, Fall, 1958.) pp. 301—5.
- (4) 小林昇「ステュアート『原理』における「奢侈」について」『立教経済学研究』第十六巻第二号(の序論)。ステュアート研究に関する二つの文献(戒田)
- (5) Eagly, Robert V., Sir James Steuart and the "Aspiration Effect". (*Economica*. Vol. XXIII, No. 109, Feb., 1961.) pp. 53—61.
- Skinner, A.S., Sir James Steuart: *Economics and Politics.* (*Scottish Journal of Political Economy*, Vol. IX, No. 1, Feb, 1962.) pp. 17—37.
- なまじの外に最近の文献として、Chanley, Paul, Sir James Steuart, *inspirateur de la Théorie Générale de Lord Keynes?* (*Revue D'Economie Politique*, No. 3, Mai-Juin 1962.) pp. 303—13. を列举すべきであるが、本稿ではそれを割愛した。
- (6) Sen, *op. cit.*, p. 19.
- (7) センは『原理』の最も顕著な特質を、グロスマン H. Grossman に倣って、ステュアートの「歴史的・制度的かつ全体として進化的な接近方法」に求め(*Ibid.*, p. 19)、「そして社会発展の各段階における主要な動因を基本的には経済的なものであるとステュアートが認めよう点を評して、かかる経済史観 economic interpretation of history は「ステュアートが生きた著作した時代にとって確かに異例である」と論じている(*Ibid.*, p. 44)」。しかしながら、経済史観へのバイアスと結合された歴史的・制度的かつ全体として進化的

論的な接近は、同時代のスコットランド歴史学派の特徴でもあり、したがって両者の間には類似性の存してゐる (Meek, *op. cit.*, p. 300) にもかかわらず、後者の「一般的な見解の特徴的な点はすべてステュアートの見解と異つていた」(Ibid., p. 183.) と、センは主張する。ミークはこの点に関して、センの認識不足を詰り、スコットランド学派の人々は「政治的な理由でステュアートに反対し、彼の経済学を軽視したかも知れないが、しかし彼らの開拓してゐた “theoretical or conceptual history” の分野では、確かに彼らはステュアートを類似の精神を有つた人物として認めていたに相違ない。この点において兎にも角にもステュアートは、セン博士が疑惑の念を表わしているよりもむしろ遙かに彼の時代に和合していたのである」(Meek, *op. cit.*, p. 301.) と、ステュアートが必ずしもいわれるような時代思潮の孤児ではなかつたことを指摘してゐる。

(8) 所謂スコットランド歴史学派は、周知の如く、スミス Adam Smith、ファーガソン Adam Ferguson、ロバートソン William Robertson、ミラー John Millar を中心として、ケイムズ Lord Kames、ステュアート Gilbert Stuart、モンボドォ Lord Monboddo、プリアー Hugh Blair、タンバー James Dunbar 等々、十八世紀後半にスコットランドで知的活動を行なつて

いたグループの呼称であるが、彼らの共通した基本命題は、(一) 社会を形成する人間の行動に関する研究、すなわち古典的社会学の目的は人間の生存様式 mode of subsistence である。したがつてその様式の変るに依じて人間の法律および政策は異ならなければならぬと云うこと、(二) 権力の大きさ、換言すれば統治形態を決定するものは財産であると云うこと、この二つの点である。(‘The Scottish Contribution to Marxist Sociology’ in *Democracy and the Labour Movement*, ed. John Saville, London, 1954.) pp. 85—87.

なおミークは、十八世紀後半において、何故にイングランドよりも寧ろスコットランドにかかる社会思想が生れたのであろうかという設問に対し、この問題に答えることは容易な業ではないので、ただこの研究を突りある方向にむけるため示唆するだけに留めると述べ、次の二点にその原因を求めている。すなわち、社会思想は経済進歩そのもののファンクシオンではない。もしもそうであるならば、イングランドにこそかかる思想が生れて来なければならなかつた筈である。然るにそれがスコットランドに生じたのは、スコットランドにおける経済進歩が極わめて急速であつたことと、その地において先進地域と後進地域の対照性が鮮明であつたこと、これである。「グラスゴーと同じ

く、一七五〇年代と六〇年代に、主としてアメリカ植民地とのタバコ貿易の進展によって、スコットランドの各都市では経済発展が非常に急激であった。経済諸技術と基本的な経済諸関係に大きな変化が生じ、又それらの変化は明らかに社会生活全体を変形しつつあった。そして新しい形態の経済組織が出現しつつあった。それこそ、それとスコットランド高地地方や封建的なフランス、或いは北部アメリカのインディアンの中に未だ実在しているような組織形態とを可成り容易に比較し得たであろう。この時期にスコットランドで、社会組織の様々な形態に対する関心が相当広がりを見せていた、そこで歴史上の因果関係をいわゆる生存様式に求める試みがなされたのは偶然ではない。〔*Ibid.*, pp. 98—99.〕

イーグリーの所説

さて、論文の発表年代順に従って、先ず初めにイーグリーのものから取りあげよう。

第二次大戦以降、後進国開発の問題が多くの経済学者の耳目を集め、それに関する書物は多くあらわれたが、就中、ヌルク *Ragnar Nurkse* の『後進諸国の資本形成』（一九五三）が著

ステュアート研究に関する二つの文献（戒田）

名である。そこで展開されている一つの重要な論点は、周知のごとく、後進国における生活水準の向上がその国の資本形成を妨げ、従ってまた産出量の成長率の減少を招来するであろうと云うことであつた。しかしながらこの見解は、進歩せる消費水準の誘引がデモンストレーション効果を伴うという一側面のみを強調し、他方その有する所謂アスピレーション効果を見過している点で批判を甘受する余地があつた。それ故、問題は両効果の強弱の度合であり、前者の効果が後者のそれよりも強力である場合には禁欲的開発方式が、逆の場合には奢侈的開発方式が選択されなければならない。そしてこの後の方式こそステュアートが『原理』の根幹をなす部分で詳しく論述している近代社会展開の方法と全く類似するものである。かくしてイーグリーは、理論的模型確定の作業から入り、次いでアスピレーション効果に関する考察が十八世紀以降の経済文献から殆んど消滅して失つた理由を求めるのである。

ところでアスピレーション効果に関する考察は、ステュアートと同時代のヒューム *David Hume* やハリス *Joseph Harris* などによつても行なわれていたけれども、就中ステュアートのその卓越していたこと、更にステュアートによる当該概念の

攝取は、彼のフランスにおける政治的亡命中になされたものであるらしいことを文献の博搜によって確認した後、イーグレイは『原理』のモデル設定を次の如く行なっている。

近代社会経済を二大分割する農業部門と製造業部門は共に密接な相互依存関係にある。後者の規模は前者における奢侈品（―生存するためには絶対的に必要ではない製造品）に対する消費性向に依存し、その性向自身は物質財に対するアスピレーション水準の関数である。したがって、もしも奢侈品に対する消費性向がゼロであるならば、いわゆる社会的剰余となるべき農業剰余 *off-farm surplus* は農業部門において産出され得ない。そこでの産出量はただ生存の為に必要な分量にすぎない。農業階級をしてそれ以上の量を生産させるには、奢侈的消費の魅力によって農業生産物の増加を計らなければならぬ。このようにステュアートの体系では、農業の生産力はアスピレーション水準の関数である。そしてアスピレーション効果がゼロの点において、封鎖的経済の人口は最適規模にあり、且つ二部門間の労働力の配分は理想的である。

アスピレーション水準の向上によって産出される *off-farm surplus* は、単なる「土地の恩恵」（重農学派）でもなければ、

偶然的なものでもなかった。ステュアートによれば、それは市場目あて（製造品との交換）の為に生産されたものであった。人々をして強制的に働かせ、*off-farm surplus* を搾出していた奴隷制度と異なり、自由なる社会ではアスピレーション水準が人間労働の唯一の動機であった。ここから、農業者のアスピレーション水準を高めることが自由社会における為政者の政策目標となるのである。「近代においては、政策の運用 *operation* は甚しく複雑であり、かつ為政者は臣民たちを奴隷にすることが出来ないので、彼は臣民たちを自らの感情と欲望の奴隷にするように誘い込まなければならぬ。これが彼らをして土地を耕作させる唯一の方法であり、それを行なう手段がどのようなものであるにせよ、それが行なわれるならば、人類は増殖するであろう。」（*Stewart, Principles*. I. p. 152.）

しかしながらステュアートは、農業者のアスピレーション水準を高める方策については余り詳しく触れておらない。そこでイーグレイはステュアートによって示唆された技術的可能性を考察しておる。すなわち、アスピレーション効果にもとづいて創出された *off-farm surplus* が製造業部門の労働者達を維持するに必要とされるものを超える場合、為政者は過剰財をその国か

ら移出すべきである。それが行なわれない限り、農業部門に従事する成員の提供する労働 effort は減少するであろう。その社会にとってアスピレーションの最適水準が達成されるのは、アスピレーション水準の向上が最早、製造業部門の労働者の生活資料となるべき off-farm surplus の増大をもたらすことができなくなる場合である。そして為政者は、その点でアスピレーション水準を引き上げようとする方策を放棄しなければならぬ。

以上がイーグレイによって単純化された『原理』の理論的モデルであるが、そこで彼が論証しようとして試みている事柄は、アスピレーション効果こそ経済成長モデルの動態的要因であるということ、これであった。

さて、十八世紀に経済学の諸文献のなかで可成り重要な位置を占め、そしてステュアートによってその経済的意義を強調されたアスピレーション効果の概念が、同世紀以降の経済学の文献から実質上姿を消して失ったのは如何なる理由からであるか。この論究がイーグレイの第二の課題となるのである。

アダム・スミスは、周知のごとく、「賃金論」の中で、「生活状態を改善し、この世を安楽豊かに終るといふ愉快な希望」

ステュアート研究に関する二つの文献(戒田)

が勤労の動機であると述べて居るが、これこそがアスピレーション効果に他ならない。しかしながら、「資本蓄積論」の個所では、その希望を達成するための方法として「個人の節儉と慎慮」が説かれている。これはスミスが経済発展の決定的な要素を、アスピレーション水準ではなく、一國の資本ストックの大きさに求めたからであった。かくして、スミスを始めとする古典派の面々は、アスピレーション水準が向上すれば、その結果は消費の増大をもたらすだけであり、資本蓄積に対してブレーキとなるであろうと論じたのである。資本および資本蓄積に関するこの強調がアスピレーション効果に対する関心を衰退せしめた第一の理由であるとイーグレイは云うのである。

第二の理由はスミス以降の価値論の状態に求められている。そもそもアスピレーション効果の概念は効用分析と密接な関連をもつものである。それなくしてはアスピレーション効果(財の効用の増加が労働供給に及ぼす影響)の分析を行ない得ないであろう。それ故、効用価値学説の発展こそアスピレーション効果の分析に大きく寄与すべき筈であったのである。事実、ジェヴォンズ William Stanley Jevons はこの分析を可能にした。にも拘らずそれによって当該概念が経済文献上で復位した証拠

は見あたらないのである。他方労働価値説との関連について云えば、社会主義経済学者にとっては資本主義制度の下での労働者階級の実質賃金の上昇という考え方が彼らの倫理的 *normative* な見解と一致しなかったし、またアスピレーション効果の概念は彼らから少しも同情ある理解をもって迎えられなかったのである。これがアスピレーション効果の概念の無視された第二の理由である。

第三のそれは、十九世紀における経済学者の圧倒的な関心が主として高度に発展した国の経済にのみ関連せる諸問題に向けられていたことである。ただし彼らは、西欧の経済制度がアスピレーション効果の重要であった段階を越えて発展していると信じていたからであろう。これがイギリスの推断である。

だが唯一の例外は、アスピレーション効果の概念を植民論に適用した最初の人としてミル John Stewart Mill に容認されたウエイクフィールド Edward Gibbon Wakefield (1795—1862) であった。彼の功績はアスピレーション効果が後進国だけでなく先進国においても重要性のあることを主張した点にあるが、その著書『シドニー通信』*A Letter from Sydney*こそ、メロンに始まり、ステュアートの『原理』の中で十八世紀における

最も完全な表現に到達したところのアスピレーション効果に関する論旨を極わめて完璧に要約したものとイギリスにより大いに賞揚されて居る。

ウエイクフィールドが「交換力に依じて、諸々の個人や社会の欲望が存在するのである」と云うとき、それは所謂セイ法則の「供給がそれ自らの需要を創り出す」と同義語である。「しかし欲望、すなわち欲求が増大する毎に、充足手段の供給される傾向がある。未開の狩人に彼の毛皮と首飾りとを交換させることができれば、彼のエネルギーと熟練とはヨリ一層刺激される。西インド諸島の黒人が自由になるや否や賃金のために働くであろうと想定される唯一の根拠は、彼らの美しい装飾品に対する憧れである。彼らは装身具や衣料品を買うために、砂糖を生産するであろうと謂われている。そして絶えず懸命に働いた人々は或る程の装身具を求め、情熱の衝撃で節約するのである。個人について云えることは、国民全体についても云えるのである。イングランドにおいては、植民地が絶えずイギリス国民の中に新しい欲求を作り出し、そしてその植民地に欲求の対象を購入すべき新市場を作り出して以来、最大の改善が生じ続けた。アメリカにおける砂糖と煙草の増加と共に、インگران

ドの穀物は更に巧みに栽培されて来た。イングランドにおいては、砂糖が紅茶に使われ、煙草が吸われたが故に、穀物は比較的少ない労働で、すなわち比較的少ない人手で収穫されたのである。そして多くのイギリス人は砂糖を使い煙草を吸うのと同じようにパンを食べて生きていた。イギリス人のアメリカへの移住と生活の維持に不相応な新生産物の調達に際して生じる彼らの勤労の移動が、イングランドにおいては、生活の維持のためのもっとも多く生産に通じたのである。つまり、必要でない物が生産されたから、多くの必要品が生産されたのである」(Wakefield, *ibid.*, Everyman Library edition, 1929.—cited in Eagly, *Article*, pp. 59—60.) と云うとき、それはアスピレーション効果への最大の賛辞に他ならない。

イギリスのウェイクフィールド、したがってまたステュアートに対する溢美の言にもかかわらず、彼の目が一度び現代に向けられるとき、そこでの彼の主たる関心が閉鎖的な農業国における非直接強制的農業剰余創出の問題であり、しかもその解決に求められたアスピレーション効果は、概念的類型を一にすることは云え、近代的生産力生成のモメントとして作用するステュアートのアスピレーション効果と、過剰資本および過剰労働

ステュアート研究に関する二つの文献(戒田)

働力のはけ口を用意せんとするウェイクフィールドの『組織的植民論』のなかで枢要の役割を果すそれとの混交せる不整合の因子であると思われるのである。